渇愛（上）

丹羽文雄

丹羽文雄

新潮社版

© Fumio Niwa 1974, Printed in Japan

渇愛（上）
昭和四十九年八月二十五日発行
昭和五十年八月二十五日六刷
著者・丹羽文雄
発行者・佐藤亮一
発行所・株式会社新潮社
162東京都新宿区矢来町七十一
電話・業務部（03）二六六一五一一一
編集部（03）二六六一五四一一
振替・東京四一八〇八
印刷所・三晃印刷株式会社
製本所・新宿加藤製本株式会社
定価・九〇〇円

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目

次

再会 7
婚外結婚 22
志紀子の日日 92
無明 151
新しい年 172

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

二回目の結婚 187
二人の友達 207
妻 225
男同士 241
謝罪 252

装幀　井田照一

渴愛（上）

再　会

午後の名古屋駅のプラットホームの階段を、三重と志紀子が並んで、ゆっくり上った。三重は和服、志紀子はドレスだが、背丈がまったく同じで、四十三歳と二十四歳の差異があるだけであった。スーツ・ケースをさげた赤帽が、先に上っていく。ホームに上ると、列車がとまっていた。高山経由の金沢行であった。

「あわただしい思いで、のりこまなくてもよいから、たすかるわ」

座席にかけると、三重の肩がいっそう撫で肩になった。客席はまばらであった。新幹線のホームには、いそがしく列車がはいってきて、いそいで発車していく。三重は何となく、こちらの乗客と新幹線の乗客の風采のちがいを感じていた。

「退役列車ね」

と、志紀子が苦笑した。母親とそっくりな、大きくて、感情ゆたかな、やさしさをたたえた眼差しであった。鏡の中の自分の眼差しを眺めるように、母は娘の眸を見入った。

「退役？」

「向こうの列車は、さすがに現役よ。こういう列車には、二、三年前にのったような気がするわ」

「本線でないから、仕方がないでしょう。この列車だって、後五年も経てば、ローカル行きよ。そのころになったら疲れはててるでしょうね」と、車内を見まわした。

列車が動き出すと、志紀子は窓外に気をとられていた。名古屋城が小さく見えた。

「疲れてない？」

と、三重がいった。東京からの乗りつぎの意味であった。

「平気よ」

それからしばらく志紀子は、母の三重を不思議な人を見るように眺めていた。

「どうしたの」

と、三重が気にしはじめた。

「ううん」と、頭を振って、「二十年も経ったら、私もお母さんのようになるのかと思ったの。ふふふ、お母さんて、ちっとも変わらないのね。大柄のせいかしら。とても四十代とは思えないわ」

「そういえば、こうしてあなたと向かいあいになって、つくづく眺めていると、そこに私が腰かけているような気がするわ。姉妹だといわれるのも、無理もないわ」と、微笑んだ。「つまりそれだけ私が母親らしくないということにもなるのね。のんきな性分だからよ」

「大柄なせいか、私は年齢より老けてみられるわ。お母さんに私が近いように思われるのよ。姉妹だなんて……」

「でも、大柄も得よ。年齢をとると、かえって若くみられるわ。大柄だからしなびていく速度が、それだけゆっくりしてるんじゃないかしら」

「のんきね、お母さんて、よくよく……」

「性分だから、仕方ないわ」

「どんな気持ち？」

「えっ、何……？」

「これから二十一年ぶりに、別れた夫に会いにいくのよ。感慨無量でしょう。その人は私の父親であり、お母さんにとっては初婚の男性よ」

三重は不安そうな表情になった。

「あなたはもう二、三回も会っているから、平気でしょうけど、私には二十一年目の再会だから、大へんよ。どんな顔して会えばよいか、わからないわ。やっぱり気持ちが落ち着かないの」

志紀子は、にやにやした。

「父に会うのと、夫に会うのとでは、本質的にちがう感情ね」

「お母さんをどぎまぎさせて、あなたは愉しんでいるのね」

「私には、会うだけの意義があるんだけど、お母さんとすれば、無理に会う必要もないんですものね」

「でも、ちょっと会ってみたい気持ちはあるのよ」

「女のひとを作って、家をとび出したとか、お母さんが嫌いになって、蒸発したというのでもないから、お互いに責めるという気持ちをもたずにすむのが、この再会の特色ね」

「いやなひとね、ひとの気持ちを愉しんで分析してるのね」

志紀子には、母の気持ちがわがことのようにわかるのだった。母もまたわがこころを娘にあずけているように、母の感情を表から裏まで見通していることが、安心になっていた。

――それにしても私たち母娘には秘密というものがない。何から何まで語り合うようになっている。あんまり遠慮がなさすぎるようだ。

二十二歳のとき志紀子は、富士野龍作と結婚したが、娘は

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

母親に閨房のことまで話すのだった。聞く方が赤くなってしまうが、世間の母と娘の壁をぶちやぶった、あからさまな会話が三重にはうれしかった。娘のこころの中や、その肉体におこった経験を、三重は自分のこころの中や、この肉体におこったことのように知っていた。世間の母娘とは、すこしちがっていた。三重はまた、自分の恋愛や体験を娘に内緒にしていなかった。

「いやだわ、お母さん、あまり正直に何もかも話すものだから、お母さんの体験をいま自分がしているような錯覚にとらわれてしまうわ。困ってしまうわ。もうすこしお母さん、世間のお母さんらしく毅然としていてほしいわ」

冗談にかこつけて、志紀子がそんなことをいう場合もあった。三重にとっては、志紀子は娘であり、友達であり、姉妹のようであった。

「あなた以外で、だれにも自分のことは話していませんよ」

「お母さんがもっと老人になって、ふたりのあいだに世間なみな一線が引けるようになるといいんだけど、何しろお母さんは現役だものね」

「お風呂にいっしょにはいっても、お母さんあなたに対してコンプレックスを感じませんよ」

「私の方が、圧倒されるわ」

岐阜駅に来て、列車は逆に走ることになった。二十一年目の再会に、三重はさまざまな想像を重ねていた。それが胸苦しいほどであった。

高辻清成が蒸発したのは、志紀子の三歳のときであった。満洲からの引き揚げ軍人であった清成が、終戦どきのすさんだ空気の中で、ふと誘われて、ある団体にひそかに加入した。その団体に加わることは、おのれの一生を決定するものであり、妻子に不幸をあたえると反省して、苦しむようになった。その団体から足を洗うことは、生命の危険をともなった。清成は三重にだけ告白して、ある日突然蒸発をした。三重は捜索願いを出さなかった。五、六年のあいだは、人相のよくない男が、高辻清成の居所をきにあらわれたが、やがてその団体が解消して、別の大きな団体に吸収されてから、清成は問題にされなくなった。

三重は、夫のいなくなった生活に慣れた。居所のわからない夫の探しようがなかった。捜索願いを出すには、年月が経ちすぎていた。三重は志紀子の成長にかかりきりになっていた。お茶の師匠は、父の代からの家業であった。父親はその方面で、多少名のある茶人であり、文人画は達人の域を脱していた。三重の弟子たちの中には、二代つづいた弟子が多かった。三重はその人柄が愛されて、多くの弟子を持っていた。井の頭公園に近い、戦火をまぬがれた家

は、すっかり古びて、いかにもお茶の師匠の家にふさわしく奥床しく、幽玄な風格を備えるほどになっていた。

その家から出たりはいったりする三重と志紀子が、そろって大柄であり、色が白く、潑剌(はつらつ)とした肉体の持ち主であることが皮肉なようであった。家柄や家屋は古いが、そこには自由闊達な、若々しい空気がながれていた。この家では、三重の大らかな性格が家風の基調になっていた。世間が何といおうと、三重は気にしなかった。あるいは、気にする神経系統に一本欠けているといった方がよいのかも知れない。それが娘の志紀子に、受けつがれていた。

「お母さん、ちょっと変わった風景でしょ？」

と、志紀子が窓外に母の注意を引いた。

川に沿って列車が走っていた。川床に斑石がごろごろしていて、両岸が絶壁になっていた。激しい水が白く泡立って、深い淵になっている。益田川の渓谷であった。

「中山七里よ」

岸の上の樹木と泡立つ流れが、絵のような対照であった。三重は紅葉の季節なので、いっそう美しい眺めになっていると思った。

「あなたは度々見てるのね」

「いまがいちばん美しいわ。お母さんいいときに、お父さんに会いにいくのね」

「会ったからってどうするつもりもありませんよ」

と、思わず本音が出た。早い流れは岩にぶつかり、泡を立て、つぎの瞬間にははるか下流に去っている。水の速度こ似たものを、三重はふと過去の一時期に経験した。去った水は永遠に戻らない。

「私には、永遠につづいていることだけど、お母さんには別ね。お父さん、すっかり田舎ものよ。あんまり期待しないでね」と、笑った。

高山駅に下りると、三重と志紀子は一団の観光客にとりかこまれた。団体の中にまきこまれたので、動きがとれなくなった。女たちはいずれもドレスで、中年以上の女性が多かった。ドレスを着慣れているとみえて、服が身についていた。しかし、男も女もひどく野暮くさかった。

「二世ね」

と、志紀子がささやいた。三重はまわりの顔を見た。日本人の顔ばかりであった。三重と志紀子の二人だけが、ずば抜けて背が高かった。三重は姿勢がよかった。お茶の師匠だけあって、いつもまっすぐ背をのばしている。観光客はおなじ同胞の中の背の高い日本人を珍しそうに眺めていた。ようやく母娘は一団から抜け出た。

「おどろいたわ、海外の日本人が高山まで観光に押しかけて来たのね」

と、三重がいった。
「農協さんだけではないわ。本土にいる私たちの方が、本土のことについては、何も知らないといってもいいのよ」
海外の日本人たちは、はなれていく背の高い母娘を眺めていた。背の高い和服の女性と、垢抜けたドレスの女性がおなじ日本人であることが信じられないようであった。
「ホテルは近いの？」
スーツ・ケースをさげた志紀子は、うなずいて歩いていく。志紀子は二度高山に来ているので、車を拾ってもすぐ下りなければならない距離にあるホテルに向かっていた。
高山という土地は、小京都といわれて、町中に清らかな水のながれているところと三重は聞いていた。その高山に、別れた夫がかくれて住んでいようとは夢にも思わなかった。高山の地名は聞いていても、生涯訪ねることもあるまいと思っていたくらいである。
歩道の左手にみぞが流れていた。清らかな水が勢いよく流れているものと期待したが、水は浅く、よどんだような流れであった。
志紀子の顔は、ホテルのフロントではすでになじみになっていた。志紀子が宿泊カードに書きこむのを、三重はそばで眺めていた。自動エレベーターにのると、
「ここのホテルで、バスつき、トイレつきの部屋は一ト部屋しかないの」
「外観は洋風だけど、中は団体客を相手に設計されているのね」
「アベック用の設備では、資金の回収がおそいからでしょうね。団体客はもうかるというわ」
予約がしてあったので、母娘はただ一つしかないバスつき、トイレつきの部屋におさまった。
「お風呂にはいって、ゆっくりお化粧をして、二十一年目の再会でお父さんを圧倒してやって……。夫に捨てられたけど、妻はこんなに若々しく、美しいんだというところを見せてあげてね」と、志紀子がけしかけるようにいった。
ホテルといっても、畳敷きであった。バス・ルームをのぞくと、脱衣場がなかったので、三重はこちらで帯をときはじめた。志紀子は窓に立って、山々を眺めていた。正面の山のいただきに、新しいボウリング場が出来ていた。高山の印象とボウリング場が、似合わなかった。この高山の地も、やがては全国にみかける観光行楽のレジャーブームに染まって、どこにもあるような観光地になるのではないかという気がした。
「あきれたお母さんね、人前よ」
と志紀子が笑った。三重はヌードとなり、腰にうすいものをまとっただけであった。

「娘の前よ」
「親しい仲にも礼儀ありよ。お茶のお師匠さんらしくもないわ」
「はい、はい」
軽くいなして、畳敷きからひと足で廊下をわたって、バス・ルームの扉に手をかけた。その動作が全部眺められた。志紀子は笑いながら、ヌードを眺めていた。撫で肩がきれいであった。ほどよく肉がついている。背中のくぼみも形がよく、胴が細く、高い腰には年齢が感じられた。どっしりとかまえている。全体が紡錘形であった。三重も志紀子も、からだに比較して顔が小さかった。
はげしく湯のほとばしる音の中で、三重は立ちつくしていた。このバス、トイレのルームをよく見ると、一枚のプラスチックの板で出来上がっていた。トイレ、洗面器、バスが、ワン・セットになっていた。ちかごろの建築法も変わったものである。バス兼トイレの場所をつくっておいてから、浴槽をそなえつけたり、洗面器や鏡をつけたり、トイレを設備するという段取りを省略して、すでに出来上がっているバス、トイレ、洗面器のプラスチックのセットを一挙にはめこむというやり方である。ホテルの宿泊にも慣れている三重には、初めての経験であった。
浴槽にからだを沈めていても、何となく気持ちが落ち着かなかった。
「おちおち洗っている気がしないわ」
と、タオルで腰を包んで、三重があらわれた。体験ずみの志紀子はうなずきながら、母がバス・ルームで当惑していたのがおかしかった。
湯上がりの三重が鏡台の前で、一応化粧が終わると、全身にクリームを塗り、マッサージをする習慣を、志紀子は小さいころから見慣れていた。何のために腕の関節や膝頭や、臀部や腿をマッサージするのか、その意味がわからなかった。母は永年その習慣をつづけているので、今では志紀子の肌よりも柔らかで、つやがあり、若いくらいであった。
――だれかのために母がそうしているのか。
と、考えるようになったのは、志紀子が結婚してからであった。が、三重の習慣はだれかのためというよりは、自分の肌を大切にしたいという気持ちから出ているものであった。三重は顔をマッサージするように、顔以外の肌も大切にした。まるで自分の肉体の美に奉仕しているような熱心さであった。湯上がりにそれをしないでいると、気分が悪かった。母の若さの秘密を、志紀子は感じていた。が、自分にはまだその必要がなかった。
紋綸子地に孔雀をあらいタッチで描き、ところどころに

金粉をまいた訪問着は、この日のために三重が新調したものであった。大胆な柄を、大柄な三重はこころにくいまでに着こなしていた。

「まるで娘の見合いにつきそいの母親といったおめかしね」

志紀子は鏡台に向かっていたが、鏡の中の母に笑いかけた。

「長襦袢も新調ですよ。何から何まで新しいの。古いものは、四十三歳の肉体だけ」

「張り切ってるのね」

「別れた妻がみじめなふうをしていたのでは、あの人も辛いだろうと思ってね。あなたもそういったでしょう」

「そのきものの柄の孔雀のように、羽根をひろげてみせるのね。別れた妻がどんなに素晴しいか、別れたことを残念に思わせてやりたいのね。女の見栄ね。その気持ち、よくわかるわ」

「一騎撃ち、といっては大げさになるけど、そんな気持ちがないこともないの」と、三重も笑った。

「お父さんには、子供が二人もいるわ」

「あなた、その子達に会ったの？」

「いいえ、会ってたら、とうにお母さんに報告してるわ」

「そうね」

「お父さんが再婚して、子供まであることを、お母さんは何とも思わない？」

三重が自分の心をふりかえるようにした。首をかしげた。そして苦笑をうかべた。

「二十一年間も、男がひとりで暮らせるものですか。再婚は、自然のことですよ。私はそんなこと考えたこともなかった。あたりまえのことと思ってたから、とくに考えたこともなかったわ」

「私も、あんまりこだわらなかったわ。そこまでお父さんの人生を拘束する権利は子供にもないんですものね。お父さんの生活を乱そうという気持ちはないわ。ただお父さんの人生の中で、かつては高辻志紀子という娘がいたという、その一部分だけを借りるだけでいいの。お父さんだって、そのつもりよ。そのため家庭がもめるのは、避けたいのよ」

「その奥さん、私が会いにきたと知ったら、何と思うでしょうね。未練と考えるかしら」

「二十一年も経てば、いまさら未練でもないでしょう。もの好きといわれるわ」

「もの好き？　なるほど、そうね。ぴったりよ」

三重は、心が軽くなるのを感じた。

電話が鳴り出した。志紀子が受話器をとりあげた。三重

は、ちょっと緊張した。
「はい、お父さん」
と、しばらく経ってから志紀子が返事をした。
「はい、いっしょです」
そこに二十一年前の夫がいるかのように三重は、口の中が次第に乾いてきた。電話口に呼び出されたならば、満足にうけ答えも出来ないと不安になった。
「はい、おぼえてます。六時ですね。その時間にまちがいなく伺います。はい、はい、万事心得てます。はい、はい、それは会ったときに……」
深刻な感じはすこしもなく、志紀子にはいかにも心のはずむ電話の調子であった。
秋の日の暮れるのは早いが、山国だけにさらに早いのかも知れなかった。ホテルでタクシーを呼んでもらって、三重と志紀子は約束の山菜料理店に向かった。志紀子が父と会うのは、いつもその料理店であった。三重は志紀子から、その料理店のもようをくわしく報告されていたが、車の中の本人はそんなことをみんな忘れていた。
「高山らしい町並みというものはとくに感じられないわね」
と、三重は走り去る町並みを眺めていた。軒も瓦ぶきで、紅殻格子を想像していた。そういう町並みは、今日の京都ですら、あまり見かけなくなっている。
「どこもみんなおなじような町よ。都会も地方も、大して相違はないわ。ただ歩いている人が、すくないだけね」
なるほど通行人がまばらであった。車を下りて、三重は志紀子のあとからつづいた。家の中の路地のような、せまい通路を通った。左手が喫茶店と酒場になっていて、右手が山菜料理店であった。その店にひと足ふみ入れて、かまちを上がって奥のテーブルに案内されると、三重はにわかに、高山という由緒のある古風な時代の中につれこまれたような気がした。まるで骨董屋の中に案内されたようであった。三重はもの珍しく、あたりを見まわした。棚や壁は、民俗館に陳列されるような古い調度品や古文書でかざられていた。客と客とのあいだを区切る衝立ても、時代がかった珍しい道具であった。民俗館の骨董品の中に、辛うじて自分らが坐っているような気がした。三重は娘に笑いかけた。
「二十一年目にふさわしいお店ね」
「まさかお父さん、そこまで計算して、ここをえらんだのではないでしょう。だって、私たち、いつもここで会ってるんですもの。このお店がいちばん落ち着くからよ」
「いかにも高山らしいわ。高山に来て、よかったと思います」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.